

C. S. ルイス 『顔を持つまで』⁽¹⁾ に見る「天国」

岡田 理香

OKADA, Rika

目次

1. はじめに
2. ルイスの「天国」 — 『顔を持つまで』
 - 2.1. プシューケーの物語概要
 - 2.2. ルイスの『顔を持つまで』
 - 2.3. 『顔を持つまで』に見るルイスの「天国」
3. 「神話」
 - 3.1. 「神話」で提示された物語
 - 3.2. トールキンのエッセイ「フェアリー・ストーリーについて」
4. 「準創造」
 - 4.1. 「神話創作」において言及される「準創造」
 - 4.2. ルイスのエッセイ「児童書の三つの書き方」
 - 4.3. ルイスの「天国」
5. おわりに

1. はじめに

「天国」のイメージは様々なところで語られ表現されてきた。ミルトンは『失樂園 (*Paradise Lost*)』で、ダンテ (Dante Alighieri, 1265–1321) は『神曲 (*La Divina Commedia*)』で天国について語った。あらゆる芸術が「天国」を描き、表現してきた。

一方 C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898–1963) の場合は、『天国と地獄の離婚 (*The Great Divorce*)』(1946) においては「煉獄」の描写は見

られるものの⁽²⁾、「天国」として明記されたものは数少ない。そのためアリスター・マクグラス (Alister Edgar McGrath, 1953-) は、「ルイスは天国の性質や外見を明確に憶測することには明らかに消極的である⁽³⁾」と述べている。

確かにルイスの「天国」は明確に記述されている箇所が少なく⁽⁴⁾、見逃される傾向にある。そのため、主たるルイス研究においてほとんど論じられてこなかった⁽⁵⁾。ルイスの描く「天国」と思われるものは、『ナルニア国年代記 (The Chronicles of Narnia)』(1950-1956)に見られるが⁽⁶⁾、『顔を持つまで (Till We Have Faces)⁽⁷⁾』(1956)も挙げられる。この作品では犠牲となった女性が神と共に暮らす宮殿が登場し、それをピーター・シェイクル (Peter J. Schakel, 1941-) は「天国⁽⁸⁾」と呼んでいる。

ルイス作品における「天国」とはどのようなものとして提示されているのか、別世界なのか、この世なのか、神話的表現なのか。この点についてマクグラスはもちろん解明していない。そこで、ルイスの「天国」を把握するためには、「天国」とされているものを抽出するしかない。

本稿では『顔を持つまで』を概観し、これを「天国」と見た場合どのような描写がなされて、どういった解釈を加えることが可能か検討する。次に、なぜ「神話」形式でも「天国」を描いたのか、ルイスのエッセイを扱い、考察を試みる。最後にルイスの執筆行為としての「神話創作」について言及する。

2. ルイスの「天国」——『顔を持つまで』

『顔を持つまで』のサブタイトルは『神話の再話』とあり、古典であるプシュケーの物語をルイスが再解釈し創造を加えたものである。そのタイトルは後半にある主人公の言葉「わたしたち自身が顔を持つまでには、神々と顔を合わせられない⁽⁹⁾」という台詞から取られている。物語のもととなった作品は、ルーキウス・アプレーイウス・プラトニクス (Lucius Apuleius, AD125-?)⁽¹⁰⁾によるプシュケーの物語である。概要は以下の通りである。

2.1. プシューケーの物語概要⁽¹¹⁾

ある国の王と王妃には三人の娘がいた。末娘プシューケーは美しく、男性たちはプシューケーを女神と崇め、アフロディーテへの礼拝をおろそかにしていた。だがプシューケーに求婚者が誰も現れないのを見て父王はアポロンに伺いを立てる。するとプシューケーを山に連れて行き、竜の餌食にするようにと告げられる。父王はそれに従うことを決意し彼女を山に置き去りにする。一方プシューケーの美を妬んだアフロディーテは、プシューケーを罰しようと息子クピードをその場に向かわせた。だがクピードはプシューケーに恋をしてしまい、プシューケーが山に置き去りにされると、宮殿を用意してそこにプシューケーを運ばせた。クピードは自分の顔を見てはならないと禁じつつ、プシューケーと暮らしはじめる。ある時プシューケーは姉二人を宮殿に招きたいと言った。姉たちはプシューケーのもてなしを受けながらも、神の宮殿に住むプシューケーに嫉妬を感じる。その後、姉たちの嫉妬からクピードを殺す企てにプシューケーはのせられる。クピードはそれを知ってプシューケーから逃げ去り、姉たちは罰を受ける。プシューケーはさすらいの旅に出た後アフロディーテの奴隷となり、無理難題を与えられつつも助けを得て困難を乗り切る。やがてクピードは再びプシューケーの前に現れて彼女を許し、神々の王ユーピテルにとりなした。ユーピテルはクピードの願い通りプシューケーと結婚することを許し、プシューケーは女神となり、アフロディーテとも和解した。こういった物語である。

2.2. ルイスの『顔を持つまで』

『顔を持つまで』は上記の物語とほぼ同様に話が進んでいく⁽¹²⁾が、ルイスは大きな変更点を加えた。それは姉オリュエルがプシューケーの亡骸を拾うために山に登った箇所である。この風景と宮殿をシェイクルは「天国」⁽¹³⁾と述べている。

この場面ではまず、プシューケーは神へのいけにえの身となっていた。その後オリュエルはプシューケーが死んだものと思い、いけにえの場となった山に向かう。ところがそこでオリュエルは生きたプシューケーと再会し、彼女が助け出され、神のもとに嫁いだことを聞かされる。彼女の姿は美しさと幸福で、前よりも輝いていた。オリュエルはプシューケーと川岸に座って会話する。

二人が会話している間、オリュエルは川岸に座っているものと思い込んでいた。ところが、プシューケーは「ここが宮殿の門です」と告げる。オリュエルには、その場所が山と続いているようにしか見えず、宮殿は見えない。オリュエルはプシューケーの言葉を受けつけないままに彼女と別れ、山で一夜を明かす。翌朝オリュエルにも霧の中に一瞬だけ宮殿が見えた。ところが彼女は何も見なかったことにし、その後も宮殿のことを口にしなかった。⁽¹⁴⁾

2.3. 『顔を持つまで』に見るルイスの「天国」

シェイクルがこの風景を「天国」と呼んだのは、宮殿に行くために川を渡るからである。彼は、川を「死」のシンボルとし、宮殿を死後の世界と見なしている。また、プシューケーが神の花嫁となったことも理由として挙げている。神のもとに嫁ぐことで不死の世界、つまり天国へ入ったと述べる⁽¹⁵⁾。これらのことからシェイクルはこの宮殿を「天国」と呼ぶが、これに加えてプシューケー自身が美と生命で輝いていた様子からも「天国」が表現されているといえよう⁽¹⁶⁾。

シェイクルはさらに、オリュエルには宮殿が見えないこと、見えたけれどもそれを口にしないことに着目し、オリュエルは天国の原型が示されたことを無視していると述べている⁽¹⁷⁾。ではこの宮殿が「天国」であるなら、それが見えなかったことや無視したことには、どういった解釈を加えることが可能だろうか。

『顔を持つまで』第二部では宮殿の存在について書かれている。オリュエルは神にこう告げる。

だがわたしから彼女の愛を盗むとは、わたしには見えないものを彼女に見えるようにするとは……おお、あなたはこう言うだろう(あなたはこの40年の間わたしにささやいてきた)、プシューケーの宮殿が実在するしるしをわたし[オリュエル]は十分見た、と。もしわたしがその気になれば、真実を知ることもできたのだ、と。だがどうしてわたしが真実を知ることを欲しただろうか?⁽¹⁸⁾

ここでは「宮殿」が「真実」と置き換えられていると受け取ることができよう。そうなること次のような解釈が有効と思われる。この世には目に見えない真実があり、それがオリュエルにとっては「宮殿」であった。⁽¹⁹⁾我々にとっては目に見えないものを「天国」としてみよう。そこで『顔を持つまで』の「宮殿」を「天国」との関係に置き換えると、それは別世界でありながらこの世と連続しており、この世にいながらにして知ることのできる世界といえる。さらに『顔を持つまで』のタイトルから神と顔を合わせる世界ということもできよう。

ではこの世にいながらにしてどのように神と顔を合わせ「天国」を知ることができるのか。ルイスは書簡で『顔を持つまで』について以下のように記している。

プシューケーはある意味でキリストのような人物です。彼女がキリストのシンボルというのではなく、全ての善なる人はキリストに似ているからです。⁽²⁰⁾

宮殿が「天国」であり、そこにいたプシューケーがキリストのような者であるなら、ルイスの「天国」とはキリストのような者の存在する場所、ということになる。これを、我々の現実世界に当てはめるなら、人はキリストのようになることで「天国」を知ることができるのではないか。

ルイスは『キリスト教の精髓 (Mere Christianity)⁽²¹⁾』(1952)でキリスト者の人生の旅路を説明する際に「神はあなたが小さいキリストであるか

のようにあなたを見ている⁽²²⁾」と書いている。ではキリストのようであるとはどういうことなのか。それはプシューケーのように神の意志に従うことなのではないか。神の意志に従うことについてルイスは『痛みの問題 (The Problem of Pain)』(1940)で例を示している。

楽園の人間は常に神の意志に従う道を選びました。それに従う時、彼は常に自分自身の欲望をも満足させていたのです。それは、一つは彼に要求される全ての行為が、罪を知らない彼の性向と実際に一致していたからで、もう一つは神に仕えること自体が彼にとっても最も切なる喜びであって、その喜びを欠けば全ての喜びは彼にとって気の抜けたものとなるからでした。「私はこれを神のためにしているのだろうか、それともたまたま私が好んでいるからだろうか」という疑問は楽園では起こらなかったのです。というのは、神のために何かをなすということは、楽園の人間が主として「たまたま好む」ことと一致していたから⁽²³⁾です。

ここから、神の意志に従う者が楽園、すなわちルイスの「天国」に当たる場所に存在するということになる。キリストのようになることは、神の意志に従うことであるといえよう。これらのことをまとめると、以下のようになるだろう。

- ① ルイスの「天国」とはプシューケーの宮殿として描かれた。
- ② プシューケーはキリストのような者である。
- ③ キリストのような者とは、神の意志に従う者である。
- ④ 神の意志に従う者は、「天国」に存在する。

これによりルイスの「天国」について暫定的に次のように言うことができるだろう。ルイスの「天国」とは、キリストのようになり、神の意志に従うことで、この世でも味わうことが可能なのである。

3. 「神話」

3.1. 「神話」で提示された物語

ではルイスはなぜ「天国」を物語形式、しかも「神話」で「天国」を表現したのだろうか。それはシュン・チュン・リー (Seung Chun Lee) によると、その提示の方がわかりやすいからであるという。リーは「ルイスにとって想像世界の主要機能は、概念によって理解するよりも世界の諸現実をより豊かに捉えることである」と見なし、ルイスの「神話」によって人は個人の持つ見解から解放されるとしている⁽²⁴⁾。さらにリーはルイスの執筆行為を「神話創作 (mythopoeia)」と呼び、「ルイス作品が提示する天と地により、我々は現実世界をよりよく知ることができる」と評価している⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾。

3.2. トールキンのエッセイ「フェアリー・ストーリーについて」

「神話創作」とは具体的に何であるのか。リーが用いているのは、J. R. R. トールキン (John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973)⁽²⁸⁾ のエッセイ「フェアリー・ストーリーについて (“On Fairy-Stories”)」であり、そこでは「神話創作」の由縁を見ることができる。トールキンは創世記で人間が神の姿に似せて創られた記述に基づき、人間も神に倣う行為、準じる行為をすることができるとしている。その準じる行為とは、作家が執筆行為において別世界を創り、登場人物を創り、その人間に言葉を吹き込むことで、それを「神話創作」と呼んでいる。

このエッセイにはルイス宛てに書かれた詩「神話創作 (“Mythopoeia”)」も収められている。以下はその一部である。

我々は世界の裂け目を妖精やゴブリンで満たしたし、
闇と光の中から神々やその家々を創り出した。
その竜の種も蒔いた—それは (使用された、あるいは誤用された)
我々の権利だった。
この権利はまだ弱められていない。

私たちはいまなお、私たちが創られた法則にのっとして
創造しているのだ。⁽²⁹⁾

この詩で「世界の裂け目を」「満たした」とあるように、「神話」とは別世界を描きながら、現実世界と別世界との間に生じた溝に架橋することである。⁽³⁰⁾リーは「神話」によって現実世界の理解を深めることが可能とされていたが、ルイスは以下のような書簡を『顔を持つまで』出版の翌年に残している。

良き神話 [—略—] はアレゴリーよりも優れている。[—略—]。
人はまだ知らないこと、ほかの方法では知り得ないことを神話において表現するのです。⁽³¹⁾

「神話」によって各人の持つ固定された視点や見解などから解放されて、物事を新たに見て捉え直すことが可能とルイスも考えていたことがわかる。この時代にはトールキンらの周囲で神話議論が興隆しており、ここでは「神話」を作り話というよりは真実に近いものと捉えていた。⁽³²⁾トールキン、ルイスらもそれに賛同していたため、彼らは「神話」に価値を置き、「神話創作」を意義あるものと捉えていたといえる。

4. 「準創造」

4. 1. 「神話創作」において言及される「準創造」

トールキンは先のエッセイで「神話」を「準創造的 (sub-creative)」なもの、執筆する者を「準創造者 (sub-creator)」と呼んでいる。⁽³³⁾先述の詩「神話創作」には以下のような言葉もある。

準創造者としての人間は、屈折した光であって
ただの白色も、その人間を通せば散らばり

多くの色となって、そして絶え間なく混ぜ合わされ
生きた形となり、心から心へと移っていく⁽³⁴⁾

ここから、「神話」には現実世界の理解を深めることに加え、ルイスの「神話創作」における「準創造」に関する考察が必要となる。

4.2. ルイスのエッセイ「児童書の三つの書き方」

トールキンのエッセイを読んだルイスは、それを「最も重要な貢献」と評価し、エッセイ「児童書の三つの書き方」で以下のように記している。

トールキンによるとフェアリー・ストーリーの魅力は、人間が「準創造者」としての機能を十分に発揮できるという事実に基づいている。それは現在好んで言われるような「人生に関する解説書」ではなく、可能な限り自分自身の副次的世界を創り出すことである。トールキンの見解によれば、これこそ人間本来の機能の一つであるため、うまく行なわれれば、自然と喜びが生じるものなのである。⁽³⁵⁾

ここから、トールキン同様ルイスも「準創造者」たるものを意識していたことがわかる。それを「副次的世界を創り出すもの」と表現し、「人生に関する解説書」以上のものと記述している。すなわち「準創造者」として「神話」を創作することは、ルイスにとって神の似姿として神の創造に倣う行為であり、なおかつ現実世界と別世界の架橋を手助けする行為と言える。

4.3. ルイスの「天国」

では上記を踏まえて、ルイスの「天国」に引き返して考え直してみよう。まず『顔を持つまで』の解釈から、ルイスの「天国」とはこの世で知ることのできるものであった。それはキリストに似たものとなることで知ることのできる構造を持つ。また、「神話」により「天国」の具体的

なイメージを持つことが可能であり、新たな視点から理解を深められることを論じてきた。さらに、ルイスの「天国」の描写は「神話創作」という「準創造者」としての行為に基づくものであった。これらを考慮すると、以下のようにまとめることが可能だろう。

- ① キリストに似ることによってこの世で「天国」を知ることが可能である。それは神の意志を行ない、神と顔を合わせることである。
- ② ルイスにとって神と顔を合わせることは、神の似姿として「準創造」を行なうことであった。
- ③ ルイスは「準創造者」として「神話創作」において神の創造に倣う副次的世界を創り出し、それが「天国」を知ることにつながった。

ルイスは神の創造に倣う「神話創作」により、神と顔を合わせる「天国」そのものを垣間見ていたということができよう。これはルイスら作家だけに該当するものではない。ルイスの『天国と地獄の離婚』にはこのような台詞がある。

全ての詩人、音楽家、芸術家は神の恩寵がなければ、彼らが語るものの中にある愛から引き離されて、語ることそのものへの愛へ押しやられてしまう。そして地獄の深みに落ち、神には全く関心を持たず、神について自分たちが語ることだけに関心を持つようになってしまう。⁽³⁶⁾

神の恩寵のうちであれば、あらゆる芸術家たちは芸術を通し、「自分たちが語ること」よりも「神」に関心を持つことで「天国」に近づき得ると解釈することができる。

これは現実世界にも適用できるだろう。ルイスの記した通り、人は「小さいキリスト」となり、神と顔を合わせる。現実世界の人間がそれぞれ

の立場でよりよきものを生み出す時に、神に倣い「天国」を知ることにつながる。これはこの世における「準創造者」の遍在であり、その意味でルイスの立ち位置は現代でも継承されうるものなのである。

5. おわりに

本稿ではルイス作品の「天国」について考察してきた。今回検討したことは、次のように言うことができるだろう。第一に「神話創作」行為としてルイスの描く「天国」があった。第二に、ルイスの「神話創作」行為そのものは「準創造者」として神に倣うものであり、「天国」的な行為だった。第三に、上記のことから導出されたことは、「天国」に存在する者は神の意志に従う者であり、神の意志に従うならば、この世でも「天国」を垣間見ることができる。そしてそれが「準創造者」の遍在と見なすことができるということであった。「神話」は現実世界の理解を深めてくれると言及したが、ルイスの「神話創作」行為そのものもまた、現実世界における人間の在り方を新たな側面から照射してくれるものといえよう。

これまでのルイス研究においては、管見の限りルイス作品の描写から「天国」と「神話創作」を関連づける試みは為されていない。それはルイスの「煉獄」の記述がより明確で着目しやすいということに起因するものと思われる。だがルイスの「天国」を「準創造者」としての「神話創作」という視点から読み解くならば、ルイス作品を新たに捉えなおすことが可能となるはずである。

注

- (1) 本稿は、日本基督教学会第 65 回学術大会（ルーテル学院大学、2017 年 9 月 29 日）において著者が行なった研究発表、「C. S. ルイスの『顔を持つまで』に見る『天国』」を加筆・修正したものである。
- (2) 岡田理香「C. S. ルイスの『天国と地獄の離婚』に見る煉獄と地獄の結婚」『DEREK』33（2013 年）、30-42 頁参照。
- (3) Alister E. McGrath, *A Brief History of Heaven*, Oxford: Blackwell, 2003, p. 134.
- (4) 『痛みの問題 (*The Problem of Pain*)』(1940) で「天国」という題で一章分の説明が為されているものの、『天国と地獄の離婚』の「煉獄」に該当するように「天国」と記された上で描写されたものはない。
- (5) 先述のマクグラスに加え、竹野一雄もルイスの「煉獄」と「地獄」については論考を深めているものの、ルイスの「天国」については『『ペレランドラ』および『天国と地獄の離婚』などに天国のヴィジョンを提示しようとする試みが見られる』と述べるにとどまっている（竹野一雄『想像力の巨匠たち』彩流社、2003 年、57 頁）。
- (6) 「アスランの国」の描写をマイケル・エドワーズは「ルイスの天国」と見なしている。Michael Edwards, “C. S. Lewis: Imagining Heaven,” *Journal of the Irish Christian Study Centre* 5 (1994), pp. 16-33: p. 23.
- (7) C. S. Lewis, *Till We Have Faces*, New York: HarperOne, 2017. コリントの信徒への手紙一 13:12 「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているように、はっきり知ることになる」（新共同訳）から引用されたと思われる。
- (8) Peter J. Schakel, *Reason and Imagination in C. S. Lewis: A Study of Till We Have Faces*, Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1984, p. 37.
- (9) Lewis, *Till We Have Faces*, p. 335.
- (10) Apuleius, *Metamorphoses*, with an English translation by J. Arthur Hanson, Vol. 1, Cambridge: Harvard University Press, 1989, p. ix.
- (11) アプレーイウス『黄金のろば (*Asinus Aureus*)』IV, 28-VI, 24 (*ibid.*, pp. 237-355)。

- (12) 物語はオリュエルの視点から描かれている。
- (13) Schakel, *op. cit.*, pp. 37–38.
- (14) Lewis, *Till We Have Faces*, pp. 118–119, 132.
- (15) Schakel, *op. cit.*, p. 38.
- (16) 『ナルニア国年代記』の「アスランの国」は先行研究で「天国」とされており、その場でも世を去った者たちは美と清さによって変化している (C. S. Lewis, *The Last Battle*, London: HarperCollins, 1998, p. 214)。
- (17) Schakel, *op. cit.*, p. 38.
- (18) Lewis, *Till We Have Faces*, p. 332.
- (19) 目に見えないものに関して『顔を持つまで』第二部にはこういった会話もある。オリュエルが「目に見えなくても実在するものがあるなど信じていないのだろう」と家庭教師の男性に尋ねると、彼は「信じている。正義、平等、魂、音楽の調べといったものが存在する」と答える。目に見えない実在は善きものであることが前提となっている (Lewis, *Till We Have Faces*, p. 161)。
- (20) 1957年2月10日クライド・キルビー宛書簡、C. S. Lewis, *The Collected Letters of C. S. Lewis*, Vol. 3, Walter Hooper, ed., New York: HarperCollins, 2007, p. 830。
- (21) 1941年、42年、44年のルイスのBBC連続放送講演の原稿がもととなって出版された。
- (22) C. S. Lewis, *Mere Christianity*, London: William Collins, 2016, p. 193.
- (23) C. S. Lewis, *The Problem of Pain*, London: William Collins, 2015, p. 97.
- (24) Seung Chun Lee, “C. S. Lewis’ Mythopoeia of Heaven and Earth: Implications for the Ethical and Spiritual Formation of Multicultural Young Learners,” *International Journal of Children’s Spirituality* 20/1 (2015), pp. 15–28: p. 19. Colin Duriez, *The C. S. Lewis Encyclopedia*, London: Azure, 2002, p. 204 参照。
- (25) Lee, *op. cit.*, p. 19.
- (26) *Ibid.*
- (27) ただりーの議論は、「ルイスの神話は子ども読者の人格形成に有効である」と結論づけることで終わり、ルイスの「天国」とは具体的に何であるか追及していない。

- (28) 1892年南アフリカ生まれ。幼少期に父母を亡くし、ローマ・カトリック教会の世話を受けて育った。オックスフォード大学エクセター・カレッジで学び、第一次世界大戦に参戦する。復学後1925年アングロ・サクソン語教授に就任する。ルイスとは英文学科教員の会合で知り合い、親交を深めてきた (Humphrey Carpenter, *J. R. R. Tolkien: A Biography*, London: George Allen & Unwin, 1977 参照)。
- (29) J. R. R. Tolkien, “Mythopoeia,” *Tree and Leaf*, London, HarperCollins, 2001 (1964), pp. 85–90: p. 87.
- (30) 準創造者の創作に関して以下のようにも書かれている。「そこで実際に起こっているのは、物語作者が『準創造者』として成功しているかどうかの証明なのである。作者は読み手の心が入って行くことのできる第二の世界を創る。その世界の中で作者の創るものは『真実』であり、その世界の法則にのっとっている」 (Tolkien, “On Fairy Stories,” *Tree and Leaf*, pp. 1–81: p. 37)。
- (31) 1956年9月22日ピーター・ミルワード宛書簡、Lewis, *The Collected Letters of C. S. Lewis*, Vol. 3, pp. 789–780。
- (32) トールキンのエッセイで言及されるアンドリュー・ラング (Andrew Lang, 1844–1912) は「神話というのはかつて過去において実際に存在した行為や考え方、制度を反映している」と述べ、ルイスと同じカレッジの講師だったクレメント C. J. ウェブ (Clement Charles Julian Webb, 1865–1954) は、「神話」を世界の始まりや死後の世界を示す「真実のようなもの」と表現している (Andrew Lang, *Myth, Ritual, and Religion*, Vol. 1, New York: AMS Press, 1968, p. 122; Clement C. J. Webb, *God and Personality*, London: George Allen & Unwin, 1920, pp. 168–170; Mircea Eliade, “Myth in the Nineteenth and Twentieth Centuries,” *Dictionary of the History of Ideas*, Vol. 3, Philip P. Wiener, ed., New York: Charles Scribner’s Sons, 1973, pp. 307–318: pp. 307–308)。
- (33) トールキンはさらに人間が準創造できる理由を「それは我々自身が創られたものだからである。そして創られたばかりでなく、創造者の姿に似せて創られているからなのである」と述べている (Tolkien, “On Fairy Stories,” *Tree and Leaf*, p. 55)。

- (34) Tolkien, “Mythopoeia,” *Tree and Leaf*, p. 87.
- (35) 1952年4月29日から5月2日に行なわれた図書館協会ポーンマス大会における講演 (C. S. Lewis, “On Three Ways of Writing for Children,” *Essay Collection: Literature, Philosophy and Short Stories*, Lesley Walmsley, ed., London: HarperCollins, 2000, pp. 97–106: pp. 100–101)。
- (36) C. S. Lewis, *The Great Divorce*, London: William Collins, 2015, p. 85.

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 おかだ・りか)